

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

腎不全看護におけるQOL研究の動向と今後の課題

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下山, 節子, 水町, 淑美, 平川, オリエ, 田中, 利恵 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15019/00000106">https://doi.org/10.15019/00000106</a>

著作権は本学に帰属する。

# 腎不全看護におけるQOL研究の動向と今後の課題

On Trend and Subject of Quality of Life Research in Nephrology Nursing

下山節子<sup>1)</sup> 水町淑美<sup>2)</sup> 阿部オリエ<sup>1)</sup> 田中利恵<sup>3)</sup>  
Setsuko Shimoyama<sup>1)</sup> Yoshimi Mizumachi<sup>2)</sup> Oriie Abe<sup>1)</sup> Rie Tamaka<sup>3)</sup>

日本赤十字九州国際看護大学<sup>1)</sup>  
The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing<sup>1)</sup>

テルモ株式会社, 日本赤十字看護大学看護学研究科修士課程<sup>2)</sup>  
TERUMO Corp. Graduate School of The Japanese Red Cross College of Nursing<sup>2)</sup>

元日本赤十字九州国際看護大学<sup>3)</sup>  
ex-The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing<sup>3)</sup>

## 要旨

本研究の目的は、わが国における腎不全看護の発展のため、慢性期医療で重要視されているクオリティ・オブ・ライフと腎不全看護に関する研究動向を分析し、必要な課題を検討することである。1990年から2004年の15年間の邦文、英文の文献を、研究目的に沿った選定基準により精選し、分析を行った。文献は、邦文34件、英文13件あり、論文数は増加傾向であった。QOL研究の傾向は、QOLの尺度開発や尺度の信頼性妥当性の検証から、信頼性妥当性が検証された尺度を使用したQOL測定、そしてQOLに関連している要因探索へと進んでいた。

また、米国をフィールドにした研究のみを抽出し、その動向をみたところ、早くから検証された尺度を利用し、QOLと関連している要因探索の研究が発展していた。また、QOLを評価のひとつとしてアセスメントツールを開発する研究も行われていた。

わが国においても、QOLの測定にとどまらず、QOLに影響を及ぼすと考えられる事柄に広い視点を持ち、要因探索や看護介入との関係を研究していくことが必要である。また、QOLの視点をベースにした、腎不全看護のエビデンス研究やツール開発の研究も可能であると思われた。

Key Words : 腎不全看護 QOL 研究動向

## 1. はじめに

わが国の透析医療は、1973年に更正医療の適応を受けて以来、患者数が飛躍的に増加している。約6千人であった患者数は、1980年には3.5万人、1990年には10万人、2000年には20万人を超え、2004年には23万人にまで達している。この間、医療制度や福祉制度の充実という背景もあるが、治療法の確立と発展なくしてはこの患者増は有り得なかったことである。今や、透析患者の平均年齢は、63歳でありながら、5年生存率は61.4%、10年生存率は39.2%、20年生存率は26.9%<sup>1)</sup>であり、透析が延命治療ではなく、長期にわたる医療であることをはっきりと裏付けている。

1990年、世界保健機構（WHO）は治癒を目的とした治療に反応しなくなった全人的医療ケアと定義されているがんの緩和ケアにおいて、その最終目標は「患者と家族にとってできる限り良好なクオリティ・オブ・ライフ（Quality of life : QOL）を実現させること」とし、さらに末期に限らず、病気の初期段階においても適用されるべきだと提言してその概念を位置づけた<sup>2)</sup>。

がんや慢性期の医療で、QOLという考えが重視されてくるのと同時に、医療関係の雑誌で、その言葉を目にすることも多くなった。しかし、その概念は時として広く漠然として取り扱われ、スローガンのであったりもする。

一方、米国では、1980年代のヘルスケア制度の大変革を機に、医療サービスのアウトカム研究が発展し、患者の視点に立脚した主観的なアウトカム指標、Health-Related QOLが組み込まれるようになり、1990年代にはヨーロッパ、アジア各国をも巻き込んだ国際プロジェクトが開始されている<sup>3)</sup>。

QOLが重視され、さまざまな尺度が開発される時代のなかで、腎不全患者に携わる看護師や研究者は、QOLをどのように捉えられてきたのであろうか。そして、何に着目し、QOLの研究を進めてきたのであろうか。その動向を明らかにすることは、腎不全看護にとっても意義深いものであると考える。また、早くからQOLに着目した研究がなされてきた米国での研究の知見は、わが国の腎不全看護の研究と発展に活かすことができるものと考えられる。

今回、腎不全看護とQOLに着目して研究動向を分析し、今後の課題を検討したので、報告する。

## 2. 研究目的

- (1) 腎不全看護におけるわが国のQOL研究動向を明らかにする。
- (2) 腎不全看護における海外のQOLの研究動向を概観し、米国研究を抽出して検討する。
- (3) 腎不全看護の発展に必要なQOL研究の課題を検討する。

### 3. 研究方法

邦文文献検索は、主に Web 版医学中央雑誌 Ver. 3 を使用し、補足的に JDream も使用した。検索ワードは、QOL と腎不全看護に関する研究論文を抽出するため、「クオリティ・オブ・ライフ」「Quality of Life」または「QOL」を含むキーワードを使用した。これに加え、「腎不全」または「透析」のいずれかを疾患分野を表すキーワードとして使用した。

英文文献検索は、MEDLINE にて、邦文文献検索と同等の意味をもつ英単語を使用して検索した。

取り扱う文献は、1990～2004 年の 15 年間とした。また、検索上で抽出された文献の抄録から QOL という用語を使用しているだけの文献、症例研究、特定の疾患治療や薬物使用効果に言及している文献、及び二次資料は今回の研究目的に合致しないため、分析対象から除外した。

更に英文文献については、看護系雑誌に掲載されているもの、または、看護師及び看護系研究者が研究したものに限定している。そのうち、邦人による論文で、研究フィールドが本邦の場合、邦文文献として分析を行うことにした。

抽出した文献は、年代別、研究者の国別に整理したうえで、研究デザイン、研究目的、研究対象、研究者の職種等について分析した。また、米国論文だけを抽出し、詳細内容を分析した。

分析には、4 名の研究者が、統一のフォームを利用して行った。

### 4. 結果および考察

#### (1) 検索結果と研究論文数の推移

研究対象論文は、邦文文献 34 件、英文文献 13 件で、全 47 件であった。邦文文献のうち、筆頭研究者が、看護師または看護系研究者（大学教員など）と所属が明記してある文献は、23 件であった。

英文文献の研究元は、米国 7 件、カナダ 3 件で約 8 割を占めた。英語を母国語としていない国からの論文もあり、スウェーデン、ユーゴスラビア、中国、日本から各々 1 件の研究があった。このうち日本からの文献は邦文文献として取り扱った。

1990 年から 2004 年までの間を 5 年ごとに区切り、研究動向を分析した。邦文文献は、QOL に関する研究が増加傾向を示し、1990 年－1994 年 4 件（12%）1995 年－1999 年 8 件（24%）2000 年－2004 年 22 件（65%）であった。英文文献は、1990 年－1994 年 2 件（15%）1995 年－1999 年 4 件（31%）2000 年－2004 年 7 件（54%）であった。（表 1）

表1 年代別文献数

	1990-1994	1995-1999	2000-2004	計
邦文文献 n (%)	4 (12)	8 (24)	22 (65)	34 (100)
英文文献 n (%)	2 (15)	4 (31)	7 (54)	13 (100)
	6	12	29	47

(2) 研究デザインを基にした研究目的の分類

抽出した47文献は、QOLを研究する目的別に、以下の7つの枠組みに分類した。分類には、QOLの測定尺度の原理4)を参考に、研究者が作成した。分類は、A.「QOLの概念生成」はQOLが何かを調べるための帰納的な研究。B.「QOL測定を試みる－信頼性・妥当性は不明」は、QOLとしての測定用具を用意しているが、研究者がQOLと考えているだけであり、信頼性や妥当性の検証がされていないか不明である研究。C.「QOL測定を試みる－信頼性・妥当性を検証」は、QOLの測定用具としてふさわしいか、信頼性、妥当性を検証する研究。D.「QOLを測定する－信頼性・妥当性検証済」は、信頼性、妥当性が検証されたQOL尺度を用いて、QOL測定を行う研究。E.「QOL測定と影響要因を探索する」は、QOLに影響する要因を探索したり、QOLとの関係を検証する研究。F.「QOLを測定し、介入効果を検証する」は、QOLを測定し、看護介入やケアのアウトカムとして活用する研究。G.「QOL測定や結果を利用、他概念の意味づけ評価」は、QOLの測定結果を利用した、他の概念の意味づけや評価として利用する研究とした。邦文文献においては、分類Aに該当する、QOLとは何かという観点での看護者による研究は行われていなかった。1990年から1994年で最も多かったのは、分類BのQOLの測定を試みるが、調査票の信頼性や妥当性を述べられていないものであり、3件(75%)だった。研究者はQOLの定義を明記しておらず、研究者自身がQOLと捉えているものを、既存の尺度で測定するか、調査用紙を作成してQOLとしていた。利用された尺度はY-G、MMPI自我強度尺度などの、性格や心理的側面の尺度であった。QOLをどのように定義したかの記述がないが、研究者がQOLを心理的側面で見ようとしている傾向がうかがえた。

1995年以降になると、分類Cのさまざまな構成概念を用いて、質問紙を作成し、その信頼性や妥当性を検証する研究が増加し、45%(5件)を占めるようになっていく。使用された概念は、がん患者のQOL構成要素であるSpitzerの4要素等であった。1998年グリーンや福原らが日本語版においても信頼性と妥当性を検証した、包括的なQOL尺度、MOS Short Form 36 Health Survey: SF-36を報告した<sup>5)</sup>。腎不全の分野においても使用され、1999年に透析患者のQOLの測定結果が報告された<sup>6)</sup>。1994年にSF-36を基にHaysらが腎疾患の特異的QOL尺度、Kidney Disease Quality of Life:

KDQOL-SF を開発し<sup>7)</sup>、三浦らが、日本語版を開発した<sup>8)</sup>。

これらの日本語版として使用できる尺度の開発をうけ、分類Dの信頼性妥当性が検証された尺度を使用した研究が増加した。2000年以降は、既存尺度を活用した研究が64% (14件) になった。この既存尺度を利用した看護研究には、岡らが早くから取り組み、KDQOLを用いて、精神状態に影響を及ぼす要因の研究を報告している<sup>9)</sup>。

邦文文献では、分類Fの、QOLを測定し介入効果を検証する研究やGのQOL測定や結果を利用し、他概念の意味づけ・評価をする研究は行われていなかった。

英文の文献では、QOLとは何かを帰納的に研究する方法が2件行われていた。分類Bはユーゴスラビアの研究であり、それ以外は、信頼性妥当性の検証がなされているQOL尺度を利用した研究であった。(表2)

研究は量的研究が44件(94%) 質的研究3件が(6%) であった。量的研究では、さまざまなQOL尺度、QOL以外の既存の質問紙、独自作成の質問紙、生理学的指標が用いられていた。

表2 QOL研究目的枠組みと年代別推移

	邦文			英文		
	1990 -1994	1995 -1999	2000 -2004	1990 -1994	1995 -1999	2000 -2004
n (%)	4	8	22	2	4	7
A. QOLの概念生成	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (50)	1 (25)	0 (0)
B. QOL測定を試みる 信頼性・妥当性は不明	3 (75)	1 (13)	1 (5)	0 (0)	0 (0)	1 (14)
C. QOL測定を試みる 信頼性・妥当性を検証	1 (25)	5 (62)	2 (9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
D. QOLを測定する 信頼性・妥当性検証済	0 (0)	0 (0)	14 (64)	0 (0)	0 (0)	1 (14)
E. QOL測定と影響要因を探 索する	0 (0)	2 (25)	5 (23)	1 (50)	2 (50)	3 (43)
F. QOLを測定し、介入効果 を検証する	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (25)	0 (0)
G. QOL測定や結果を利用他 概念の意味づけ評価	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (29)

(3) 使用されたQOL尺度

使用されたQOL尺度を表3に示す。日本をはじめ、スウェーデン、中国と、各国でQOL尺度が開発された経緯がうかがえる。共通して使用された尺度は、SF-36・KDQOL・Caregiver Burden Interview : CBS (Zarit)・Quality of life Index : QLI (Ferrans & Powers) であり、開発元の国はすべて、米国のものであった。

邦文文献では、SF-36やKDQOLの出現により、急速にその尺度を利用したQOL研究が増加していた。また、WHO/QOL-26の尺度も比較的多く使用されていた。WHO/QOL-26を使用した研究者は、地域・在宅分野の看護研究者であった。研究者の主なフィールドがQOL尺度選択に影響しているのではないかと考えられた。また、高齢化が進み、2000年にわが国では介護保険法が制定され、QOLの研究においても、Zaritという介護者のQOLを測定する尺度を使用した研究が行われるようになっていた。何のQOLをみるかまた、何とQOLをみるかで、的確にQOL尺度を選択する必要性があると考えられた。

英文文献では、2000年に15の変数を利用した、独自のQOL尺度を開発しようとした研究がユーゴスラビアから報告されている。スウェーデンや中国以外にもそれぞれの国において、独自に開発されたQOL尺度の存在が予測され、興味深かった。また、言語の壁は、尺度を供用することを妨げていると思われた。

表3 使用されたQOL尺度

年	掲載	邦文			英文		
		1990-1994	1995-1999	2000-2004	1990-1994	1995-1999	2000-2004
	1989年大阪透析研究会で行われたQOLシンポジウムの評価基準	1	1	0			
	WHO/QOL-26	0	1	4	0	0	0
	QLI (Ferrans & Powers)	0	1	1	1	1	
	SF-36	0	1	9		1	2
	KDQOL	0	0	7		0	1
	CBS (Zarit)	0	0	2		0	1
	GenQOL (Hathway)					0	1
	Chinese dialysis QOL Scale						1
	SWED-QOL (スウェーデンQOL尺度)						1

重複使用あり

#### (4) 対象者

邦文における、研究対象者は、ほとんどが患者であり、患者 28 件 (82%)、家族 3 件 (9%)、患者と家族の両方を対象にした研究が 3 件 (9%) であった。わが国における研究対象は主に患者に向いていることがわかる。家族を対象に研究報告がなされたのは、1996 年以降であり、まだその数は少ない。英文文献では、1994 年に配偶者に対する緻密な研究が報告され、他にも看護師や医師を対象に含めた研究も報告されていた。患者以外を対象にした研究であっても、患者との QOL の関係性を見出しており、研究対象者は患者以外も必要であると思われた。

わが国の透析患者は高齢化しており、患者とともに生活する家族の存在や関係性の研究も必要である。また、患者をとりまく社会環境も多様化しており、透析施設内だけでなく、在宅で患者を支える介護職など、多職種との関連も今後の研究対象にする必要があると思われる。

邦文における対象者の治療法は、血液透析が 21 件 (62%) 腹膜透析 7 件 (21%) その両方が 5 件 (16%) であった。英文では、End Stage Renal Disease (ESRD) としての選択が多く、複数の治療を含めた対象者の選択がされていた。また、それは、他国が移植の進んでいる背景や、通院血液透析だけに治療選択が偏っていないことをも示す結果であると思われた。わが国では、95% が通院血液透析であり 10、在宅血液透析や、腹膜透析、腎移植といった治療法を行っている患者は少ない。しかし、ひとつの治療法だけでなく、その時々に応じて治療法を変更することもある。長期にわたる医療であるがゆえに、その QOL について追及していくことは、治療法の実施や、意思決定、不安軽減の対応に重要な役割を担う看護者にとっても必要であると考えられる。また、邦文の研究対象者で、入院患者のみを対象にした研究はなく、入院と外来患者を対象にした研究は、2 件 (6%) であった。高齢化が進み、介護施設を併設する透析施設も増加傾向であるなか、入院透析や通院透析、在宅透析という視点で QOL を含めた研究も、必要になると考えられる。

#### (5) 米国論文の概要

QOL の研究が早くから行われていた米国に注目し、英文文献より米国をフィールドとした研究のみを抜粋した。文献数は 7 件 (54%) であった。その研究概要を表 4 に示す。

米国での研究では、人種データが必ず記載されており、また、どの州のいくつの施設から集めたサンプルであるかも明記されていた。人種に関係する研究は 2 件あった。その国特有の文化的背景を見落とさないように、対象者の選択や研究の変数を決定して研究する必要があることに、改めて気づかされることであった。研究内容は、QOL に関する要因の研究が早くから行われていた。看護に重要なアセスメントツールの開発の評

表4 米国の腎不全看護とQOLに関する論文

研究者(発表年)	タイトル.掲載誌	使用した尺度	対 象	研 究 概 要
Dunn,S,A., Lewise,S,L., Bonner,P,N., (1994).	Quality of life for spouses of CAPD patients. ANNA J.	QOLIndex Jalowiec Coping Scale・ Dyadic Adjustme nt Scale	CAPD 患 者の 配 偶 者38人	CAPD患者の配偶者のQOLとQOLを予測する重要因子を明らかにする。QOLは夫婦間の協力、次に収入が影響因子であった。
Wicks,M, N.,Milstead, E,J.,Hatha way,D,K., et al. (1997).	Subjective burden and quality of life in family caregiver of patients with end stage renal disease. ANNA J.	CBS・Gen QOL	ESRD 患 者 家 族 96 人 ( 通 院 HD / PD / HHD / 透析なし)	ESRD患者の家族介護者の負担とQOLの相関関係、影響する変数を明らかにすること。介護負担とQOLはリンクしていた。
Welch,J,L., Ausitin,J, L., (1999).	The Quality of Life in black hemodialysis patients. Adv Ren Replace Ther.	QOLIndex	通院HD患 者79人	黒人のQOLに影響する事柄との関係を明らかにすることで、人種の違いによってQOLを改善するための介入を変える必要がないことや、透析早期に支援が必要であることを示唆した。
Kutner,N,G., Zhang,R., McClellan, W,M., (2000).	Patients-reported quality of life early in dialysis treatment: effects associated with usual exercise activity. Nephrol Nurs J.	KDQOL・ SF-36	ESRD 患 者 226 人 (HD154/ PD72)	透析導入して間もない患者のQOLを調査し、QOLを予測する重要な要因を確認した。
Curtin,R,B., Bultman,D, C.,Thomas- Hawkings,C., et al. (2002).	Hemodialysis patients' symptom experiences: effects on physical and mental functioning. Nephrol Nurs J.	SF-36	血 液 透 析 患 者 307 人	透析患者が体験する徴候とQOLや関係要因をみた。体験がありそうな47徴候(皮膚掻痒・食欲不振・レストレスレッグス症候群など...)のうち22に体験があり、うち17はQOLに著しい関連を示していた。
Schneider, R,A., (2003).	Fatigue among caregivers of chronic renal failure patients. Nephrol Nurs J,30(6), 629-633,664.	MFI-20・ FSS・CES- D	ESRD 患 者 の 介 護 者 99 人	ESRD患者の介護者はQOLが低いと報告されており、疲労感が原因ではないか。疲労の存在と度合いを確かめ、構造を示した。
Lamb.G., Kip,K,E., Mapes,D.,et al. (2004).	Reliability and validity of risk assessment tool for patients with kidney failure. Nephrol Nurs J,31(3),267-281.	KDQOL	253人の関 係者	腎不全患者のリスクアセスメントツールの妥当性を入院やKDQOLを使って検証した。

価値として、QOLの測定をしている研究は、わが国の腎不全看護の研究には全くない知見であり、今後の研究の必要性やひとつの方向性を示すものであると思われた。また QOL の測定は、他の要因を予測することにも活用できるという知見も得られた。

## 5. まとめ

腎不全看護における、QOL 研究は、邦文 34 件、英文 13 件の計 47 件が確認され、研究数は増加傾向であった。研究内容は、研究者が QOL の尺度を模索することから、QOL 尺度を研究者の視点で活用する傾向にシフトしており、その傾向は、日本より米国のほうが早い時期でシフトしていた。

今回、海外での QOL 検索数が少なく、なんらかのキーワード不足が影響していたことも考えられる。また、小児領域、腎移植のみの領域の文献は分析を行っておらず、腎不全看護全体をとらえるには論文に偏りがあり、今回の研究の限界であると考えている。

しかし、今後に必要な腎不全看護の研究の方向性を見出すことはできたと考えている。QOL の維持向上をはかるためには、QOL がアウトカムとしての測定にとどまらないこと、QOL に影響を及ぼす要因を明らかにすること。また、測定は予測因子をも抽出する可能性があること。対象者や医療環境の変化という広い視点をふまえた研究を行う必要があることなどである。看護介入やケアが QOL にどのように影響するかを前向きに研究することは、腎不全看護の質の向上につながると思う。QOL をベースにした看護の研究は、腎不全看護のエビデンス研究やアセスメントなどのツール開発にも有用となる可能性があり、QOL 研究は腎不全看護の発展に重要な視点であることが示唆された。

## 引用文献

- 1) 日本透析医学会統計調査委員会：図説わが国の慢性透析療法の現況（2004年12月31日現在）、東京、2004.
- 2) WHO (1990) / 武田和文 (1993) 監訳：がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケアー がん患者の生命へのよき支援のために、金原出版.
- 3) 福原俊一、鈴嶋よしみ、尾藤誠司他 (2001). SF-36 日本語版マニュアル (ver1.2). (財)パブリックヘルスリサーチセンター、東京、2001.
- 4) Peter,M,F,.David,M, (2000) / 福原俊一. 数間恵子監訳 (2005) : QOL評価学測定. 解析. 解釈のすべて. 株式会社中山書店. p27-41.
- 5) ジョセフ・グリーン. 福原俊一. 三浦康彦 : 血液透析患者および腹膜透析患者の QOL、日腎会誌、40、1998、p78.
- 6) 高井一郎、新里高弘、前田憲志他 : 透析患者の QOL-SF を用いた試み、臨床透析、

- 13、1997、p43-50.
- 7) Hays R D, Kallich J D, Mapes D L : Development of the Kidney Disease Quality of life (KDQOL TM) Instrument. Qual Life Res, 1994 (3), 1994, p329-338.
- 8) 三浦靖彦、Green J、福原俊一 : KDQOL-SF TMversion1.3 日本語版マニュアル、(財)パブリックヘルスリサーチセンター、東京、2001.
- 9) 岡美智代、梶浦尚美、山本スミ子他 : Kidney Disease Quality of Life Short Form (KDQOL-SFTM) を用いた血液透析患者の精神状態に影響を及ぼす関連要因、透析会誌、34 (10)、2001、p1299-1305.
- 10) 日本透析医学会統計調査委員会 : 図説わが国の慢性透析療法の現況 (2004年12月31日現在)、東京、2004.